

ずたぼる金屏風

三 春

押入れに放り込んだまま忘れていた古い屏風を久しぶりに引っ張り出した。

先祖伝来などという大層な代物ではなく、十年前に衝動買いした屏風だ。我が家から徒歩四〇分ほどの展示場で屋内最大規模の骨董市が開かれると聞いたので、散歩を兼ねて見物しに行ったのだった。

欲しいと思ったのは薬筆筒や火鉢だけれど、散歩ついでに衝動買いするような値段ではない。その時、隅に置かれた屏風に目が留まった。保存状態がかなり悪い。これなら私にも買える金額かも。

店主いわく、自分用のつもりだったけど欲しいなら一万円でもいいよ、ということ即決！

大学の後輩・安河内さん(TV「なんでも鑑定団」で書画を鑑定)に、落款の「春拳」とはどんな絵師かと尋ねたら、近代京都画壇を代表する画家・山本春拳のことだと教えてくれた。

期待していなかっただけに嬉しかった。居間の板張りの床にもよく似合う。和と洋のコラボが、それまでとは一味違う垢ぬけた空間を作り出す。

ところが、思わぬ伏兵に足をすくわれた。猫の羅門(オス)がこの

新参者に興味津々で、周囲を駆け回り、スリスリして押し引いたり、果ては飛びついて破くやら爪痕をつけるやら、散々な目にあわせてくれた。これでは身が持たぬと仕舞い込んで早や十年、今回は束の間の日目を見ただけのことである。

あらためてよくよく確かめれば、幅二七五cm、高さ一三六cmの六曲、金地に松の古木と花鳥。金地といえば聞こえはいいがもはや赤銅色に近く、一枚の扇にいたっては裏の当て紙のおかげでやつと繋がっている有様。それでも、「大正丁巳吉日 春拳」という落款を頼りに調べたら大正丁巳は一九一七年(大正六年)、つまり今年で百四歳を迎えるのだ。春拳については「明治から昭和初期にかけて活動した円山四条派の日本画家」「大正一五年フランス政府よりレジオンドヌール勲章を授与された」「明治天皇も春拳を好み、今際の際に床の間に掛かっていたのも春拳の作品だった」などの記事を発見した。

尾羽打ち枯らしたこの屏風、表舞台に立たせてやりたいが、さてさて、羅門の毒牙から守る手立てはないものか。

